

名湯・秘湯で湯浴みする(その二八)

折 挟 Y

「五九」 多分、最後のフルムーン(二〇一四年)

湯布院温泉の玉の湯に泊まりたいとカミさんが言い出した。しばらく経つと「あれやめよう」などと言うこともあるから実現するかどうか怪しい面もあるが、行きたいと言われたら、どういうコースが可能かすぐ調べるのがボクの性分である。そうこうしているうちに、NHKで筋湯の共同浴場についての放映があり、いくつもの打たせ湯を紹介しているのを目の当たりにして、カミさんは筋湯に行きたいと言いだした。二つを組むとすればコースは自ずと決まってくるとしたものだ。コースを作って宿に電話を入れたところ、由布院の玉の湯は満杯で、あれこれを経て、結局、山光園を予約することとなった。観光シーズン真っ盛りで早くから予約が殺到したという。この事情は京都も同じで、公立学校共済の「花のいえ」も「堀川会館」も一〇月末時点ではすでに満杯だった。

この時期に岩井温泉まで回ろうと思ったのは、伯備線沿線の景色が素晴らしくという期待と秘湯の宿

を訪れたい希望の二つからだった。城崎温泉で駅前を歩くこともできることも楽しみである。

一一／二五(火)

小田原 八〇八ひかり

新大坂 一〇三〇

一一五九さくら五五五

久留米 一四五四

一五〇七ゆふいんの森五

由布院 一六四四山光園(泊)

〇九七七八四一二九五

一一／二六(水)

由布院 一四〇三

豊後中村 一四二五

バス 一四四〇

筋湯温泉 一五二四喜安屋(泊)

〇九七三三七九一三三四一

一一／二七(木)

筋湯温泉 八三三

豊後中村 九一六

九二四ゆふ二

博 多 一一一八

一二〇九さくら五五〇

岡山

一三五七

米子

一四〇五やくも一五

鳥取

一六一五
一七一―Sおき四

岩美

一八一六

岩美

一八三五

城崎温泉

一八五九岩井屋(泊)
〇八五七―七二―一五二五

京都

一五〇五

京都

一五〇五
〇七五―三四―一三二五六

小田原

一四三三ひかり五二四
一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原

一六三七

小田原八〇八発のひかりに乗るのいつものバスで本厚木に出て小田急で小田原へ回ることが定番となっているのだが、平塚回りで行くことも可能だと気づいて今回は平塚経由で行った。道路がどの程度混雑するか、予測もできなかったもので、六一三のバスに乗った。通常三五分から四〇分ぐらいで平塚へ着く。このときも道路の混雑はなくて七〇〇前に到着し、七一一の熱海行きに乗り、七三三に小田原到着となった。久大線の特急の時間に合わせて切符を手配したのだから、新大阪で一時間半ほどの空きができてしまった。同じ待ち時間なら岡山でも広島でも費消できることに気づいて、新大阪到着と同時にみどりの窓口へ直行したが、列車利用状況の掲示を見ると一〇五九発のさくらに空きはなく、当初予定どおり新大阪で待機するほか手はなかった。後で確かめたところ、さくらにはグリーン車が半両しかついでいないため、すぐ満杯になってしまふことが判明した。大人の休日倶楽部ジパングでも、今回收利用したフルムーンバスでも、乗れる列車に制約があって、コースの設定に苦心することが多い。新幹線で言えばJRが力を入れている「のぞみ」が利用できないのは理不尽な気がしてならない。

ともあれ、由布院に当初予定どおり到着し、宿の送迎車で山光園へ着いた。ここは二度目の利用だが、駅から四、五分の距離にあることは頭になく、もつと遠いように思っていたのだが、早めの到着はありがたかった。小降りながら雨が降ってきたからである。

部屋も温泉も料理も期待通りの内容で大いに満足したが、部屋に居ながらにして由布岳の勇姿が見られるのは嬉しいことだった。

二日目も小雨だった。行程にはゆとりがあったが、雨のために往来は不自由で、結局、金鱗湖までタクシーで行きその周辺をぶらぶらする程度のことになった。以前利用したことのある観光馬車も雨降りのため馬が出ないということで休業となったりしたからだ。今回の旅行で特に目についたのは外国人旅行者が多いことで、中国語、韓国語を操る人々で溢れかえっていた。

中には何語か聴き取れない旅行者もいて、円安効果で海外から日本に旅行に来る人が多いというのは本当のことだと実感した。前日「ゆふいんの森五」で一緒になった東南アジア系の四大家族と金鱗湖近くの亀の井別荘の庭でひよっこり再会したりした。若夫婦と五歳と二歳の男の子という一行である。言葉は中国語でも韓国語でもなく、またタイ語とも思われなかったたので、あるいはマレーシア語なのかもしれないと思ったりした。

豊前中村から筋湯に向かう路線バスでも外国人旅行者は大勢見かけた。明らかに中国語と思われる言葉を操っていた一団だったが、途中、九重「夢」大吊橋の

ところで雨の中を下車していった。

筋湯温泉喜安屋旅館は客室が離れふう山小屋の趣で個室に分かれており、それぞれに屋内露天風呂がついている。大風呂は内風呂で、個室の露天風呂よりやや大きいという感じである。日によって温泉の温度が異なるということだったが、両日ともちょうど適温で、気兼ねなしに風呂を楽しむことのできるしつらえはなかなかの趣向である。食事は夕食も朝食も食事処でいただく。質量ともなかなかの内容だった。三日目の朝は八三三発の路線バスで豊後中村へ赴いた。途中渋滞もなく順調に駅に到着したという感触だったが、八分あるはずの乗り継ぎ時間は結果的にぎりぎり、跨線橋を渡ってホームへ降りるとほとんど間なしに「ゆふ二」が入ってきてちよつとびっくりした。

博多で「さくら」に乗り継いで岡山での乗り換えに肝を冷やした。乗り継ぎに八分の時間があったが、新幹線のホームから在来線のホームまでの移動は案外時間を要するもので、あらかじめ新幹線車内で車掌さんに降り口やエスカレーター・エレベーターについて聞いて降らせておいたのがほとんど役に立たず、階段を歩いて降りる羽目になった。幸い、在来線ホームが新幹線改札口の近くだったお陰で、乗り損なうこともなく「や

くも一五」に乗り込むことができたが、発車時刻まであと一、二分という間合いだった。足の不自由なカミさんは「朝の出発も早く、乗り継ぎがこんな忙しい旅はもうこりごりだ」と悪態をついた。

伯備線沿線の車窓からの眺めは紅葉が見事で満足の行くものだったし、米子近くの大山の景色もそれなりだったが、鳥取まで、また鳥取から岩美まで時間がかかって、宿到着が一九時過ぎとなったのは計画上の欠陥だったかもしれない。岩井屋での入浴は結局朝風呂だけになってしまった。この秘湯の宿は二回目の泊まりだが、前回は焼酎が廉価で盛の良かったことが記憶にある。今回もと期待して乗り込んだのだが、さほどのことはないのだった。

山陰本線はすっかりマイナーになってしまい、列車の運行本数もずっと減ってしまったために、旅程は極めてゆったりしたものになった。城崎温泉では待ち時間の合間に、柚最中を求めて温泉街へ出かけた。観光案内所で在処を確かめて赴いたのだが、結局、その斉藤菓子店を通り越してしまい、行きすぎた戻りの帰路で漸く見つけて最中を手にすることができたのが幸いだった。これはずっと以前、ツアーでここを訪れた際、財布を持たずに出かけて、宿で精算する形で最中を購

入した記憶が残っている代物なのだ。柚最中と言えば、由布院も柚が名物で、柚そのものや柚羊羹などで手に入れることができるが、柚最中はどこも作っていないことが分かってちよつと奇異に感じている。難しい食べ物ではないから、柚が特産なら、柚最中が作られて、売られていてもいいはずだと思ったりした。

京都をはじめから素泊まりと決めていて、夕食も朝食もいわゆる自由食ということになった。夕食は資料を見て、権兵衛といううどん屋がいいとカミさんが言うので祇園へ出向いた。観光シーズンだから路線バスは満員。道路も渋滞が激しい。バス停からちよつと戻って四条通りを西へ歩く。お店の女将は徒歩五分ほどと言うが、歩行困難のカミさんの足では一〇分経っても行き着かない。例によってカミさんはぶつぶつ愚痴るのだが、ここまで来たら権兵衛を探し出すより他に手はないわけで、それでも一五分ほどでうどん屋に着したのはよかった。特記するほど美味だとは思えなかったが、ひっきりなしにお客が来店するのにはびっくりした。ボクは油揚げを刻んで使うきつねうどんを半ライス付きで食し、カミさんは鳥なんぼを注文した。いつも思うのだが、カミさんは黙って食す姿がちよつとかわいくて、見直す思いがする。

五日目。宿の風呂は朝はシャワーだけという触れ込みだったが、湯殿に湯が溜まっていて入浴も可能だった。ボクはいつもひげを剃ってからシャワーだけを使う習慣だ。朝飯は前の日に駅ビルで求めたいわゆる菓子パン。九時から貸し切りタクシーを二時間頼んで、どこか紅葉のいいところを回ってもらうことにした。

この日も小雨降りになっていて、まず、永観堂へ行った。貸し切りタクシーは特に便宜が図られて、入り口前まで車を着けることができる仕組みである。時期的に少し盛りを過ぎた頃だったが、見事な紅葉だった。

赤黄青が入り交じって素晴らしい景色である。人混みも負けずに盛んで、ここでも外国人客が手を振って行き交っている。

永観堂の後は堀川通りのイチヨウ・ポプラを見せてもらった。延々と続く黄色の並木が見事だった。その長さが尋常ではない。同志社大学関係の諸施設の周囲も黄色い紅葉に覆われていた。

京都と言えば欠かすことの出来ない錦市場を一回りして、帰りの新幹線のために京都駅までタクシーのお世話になった。無論、途中ホテルに寄って荷物を運んでもらうのを忘れるわけにはいかなかった。



岩井屋旅館



金鱗湖畔にて

「六〇」スタンプ泊九個目を目指して(二〇一五年)

一／一九(月) 本厚木 八二二さがみ七〇

新宿 九一五

九二五

東京 九三八

一〇〇〇つばさ一三三

大石田 一三一七

一三四〇送迎バス

銀山温泉 一四一〇能登屋旅館(泊)

〇二三七―一八―二三二七

一／二〇(火)

銀山温泉 一〇三五

一〇一一

大石田 一〇一一

一二二一つばさ一三一

新庄 一二三五

一二五七

一／二二(水)

中山平 一三五三琢瑋(泊)

〇二二九―八七―二二二六

鳴子温泉 一〇〇三

一〇四九

古川 一〇四九

一一〇八やまびこ四二

福島 一一五〇

一三四〇

高湯温泉 一四一六吾妻屋(泊)

〇二四一五九―一―二二一

一／二二(木) 高湯温泉 一〇一五

福島 一〇四六

一一一六やまびこ一三六

東京 一二四八

カミさんの足腰が弱ってきてしつかり歩くことが段々難しくなってきた。国内小旅行もせいぜい三泊止まりで、それ以上は身体が保たない感じである。

そういう意味で、JR東日本大人の休日倶楽部ジパングの会員パスは貴重で、できるだけ利用したいものだと思っている。秘湯の会のスタンプは現在四個溜まったところだから、秘湯の宿で後三泊が二回できれば九個目の招待に届くことになる。

というわけで上記の旅行計画ができたのだが、二〇一五年の正月に入ってすぐ、カミさんもボクも風邪を引く羽目に陥った。こういうときはいつも、瀬谷の渡辺医院まで出向いて診察を受け、薬を処方してもらったことになっている。渡辺先生は瀬谷高校の学校医で縁が出来た先生である。

一月六日、渡辺医院を訪ねたところ、渡辺さんはず
在で娘さんが代診していた。カルテには長い間の診察
記録が記されているから、初めてでも心配はない。父
の渡辺さんと同じような診断で、風邪にも花粉症にも
効く薬の処方を受けた。指示通りに薬を服用したのだ
が、身体が薬を受け付けない。薬を吞むと吐き気を催
して戻ってしまうのだ。結局薬の服用を中断して様子
を見るほかないこととなった。無論病状がすぐ改善さ
れることはないこととなった。無治癒力が足りなかったから、風
邪が抜けるのに一ヶ月ほどの時間が必要となった。カ
ミさんは医者嫌いだから、診察も薬の処方もなく、自
然治癒力に頼るばかりで、やはり風邪が治るまで一ヶ
月以上が経過した。かくて、大人の休日会員パスの期
間は過ぎていき、上記計画は自然消滅となった。計画
そのものは生きているから、またいつか、休日倶楽部
会員パスの有効期間に実行しようと考えている。

大人の休日倶楽部会員誌三月号が送られてきて、二
〇一五年度の会員パスのスケジュールが次のように紙
面に掲載されている。

- ① 六／二五(木)～ 七／ 七(火)
- ② 一／ 五(木)～ 一／一七(火)
- ③ 一／二一(木)～ 二／ 二(火)

これによれば直近のパス期間は①ということになる
が、この期にはこのところ二年ほど開催している言語
学科ミニOB会が行われることになっており、今年の
開催地は横浜で、ボクが幹事役を務めることになって
いる。例年木曜日の宿泊、金曜日の解散で行われるか
ら、この伝で行けば六／二五か七／二かということに
なるわけで、当事者の都合を聞いたところおおむね七
／二で落ち着きそうな様子となっている。

このパス期間に秘湯めぐりの日程を組もうとする。
娘の朋子の都合で毎週日曜日には在宅していることが
要求されるから、月曜日に出かけるとすると六月二九
日しかないために七月一日までの三日間しか日程を組
むことができないことになる。土曜日までの旅行とし
ても六月二五日から二七日までの三日間となって条件
は同じことになるから、冒頭に掲げた旅程を実施する
ことはできない。かくて秘湯二泊三日間の旅行計画は
次のようになった。長野から金沢まで延伸する北陸新
幹線が三月一四日に開業することとなったので、ちょ
っと乗ってみようと思つてのことだった。

六／二五(木) 本厚木 八二二さがみ七〇

新宿

九一五

能生 一〇二八鮮魚センター

東京

九三〇

糸魚川 一二二八

長野

九四三

東京 一三三二

須坂

一〇二二かがやき五〇九

東京 一三三四はくたか五六四

須坂

一三五二

東京 一五二八

須坂

一三二八

東京 一五二八

須坂

一三四六

東京 一五二八

須坂

一四〇五

東京 一五二八

須坂

一四四五

東京 一五二八

須坂

一四四五

東京 一五二八

須坂

一四四〇

東京 一五二八

須坂

一四四〇

東京 一五二八

須坂

一四四〇

東京 一五二八

須坂

一四四〇

東京 一五二八

須坂

一四四〇

東京 一五二八

これまでの休日倶楽部会員パスのフリーエリアにはJR西日本の一部区間が含まれていて、金沢や福井まではこのパスで行けたのだが、今回から東日本に限られることとなった。

そのため、このコースでいえば上越妙高・糸魚川間はJR西日本エリアであるため別途実費を負担しなければならぬが、時刻表の早見表を見るとこの間の負担は運賃六七〇円特急料金八六〇円(自由席)であることが判って一安心した。上越妙高と糸魚川間の指定席は二三六〇円だというからバカにならない。

金沢・長野間が延伸して北陸新幹線となったのは二〇一五年三月一四日のことであるが、JR東日本はこの日からダイヤを改正した。今回この旅行に出て、このダイヤ改正が多くの変更を伴ったことを知った。一つはこれまでの北陸本線がJRから離れて第三セクターによる運営方式となり、富山市振間が「あい」の風富

六／二六(金)

蕨温泉

九二五

蕨温泉

須坂

九五五

須坂

長野

一〇〇八

長野

長野

一〇四三

長野

糸魚川

一一二五はくたか五五七

糸魚川

送迎

一一五一

送迎

笹倉温泉

一四三〇

笹倉温泉

龍雲荘(泊)

一五〇〇

龍雲荘(泊)

龍雲荘(泊)

〇二五五

龍雲荘(泊)

龍雲荘(泊)

九〇〇

龍雲荘(泊)

龍雲荘(泊)

九四〇

龍雲荘(泊)

龍雲荘(泊)

一〇〇八

龍雲荘(泊)

山鉄道」、市振・直江津間が「えちごトキめき鉄道」と名づけられたこと。二つは上野東京ラインが開通したことにより、これまで東京始発だった東海道本線が小金井・宇都宮・高崎などを始発駅にしたこと。東京が単なる通過駅になってしまったことで、新幹線からの乗り換えの場合、座席の確保がままならないということになってちよつと困惑した。今回は偶然新橋で席が取れたから幸運だったが、不運なら、平塚まで一時間立ちっぱなしとなるかもしれない。旅の終わりがこういうことではちよつと耐えられない感じだ。

これまで長野近郊の秘湯の宿といえば奥山田温泉の満山荘というのが相場だった。今回も満山荘を候補に挙げて問い合わせたところ。満山荘では、山田温泉から満山荘までの足が用意できない、タクシーを利用してくれ、と言う。今まで送迎の車を転がしてきた老館主が歳で運転できないためということだった。そういうことなら『日本の秘湯』を当たって見つけたのが蕨温泉・わらび野だった。一〇室ほどの小さな宿で家庭的なもてなしが特徴ということだった。

わらび野の女将は気さくな方で、かつて横浜の洋光台に住んだことがあると言い、伊勢原にも親戚が住まっっていると言う。山田温泉から少し上ったところにあ

る七味温泉で弟さんが宿を経営しており、その方の誘いで蕨温泉に来たのが一〇年ほど前の由。宿の敷地の中に村営の温泉施設が造られたのが平成の初めの頃、あの竹下首相の一億円ふるさと創生計画に乗ったものだという話である。この村営温泉は年間会費一万五〇〇〇円で毎日何度でも利用することが出来る決まりになっっているという。村営温泉は山田温泉やYOU遊ランドにもあって、これらも利用の対象である由。

この日わらび野の客はまたしてもわれわれ二人だけということ、何か申し訳ないような気持ちだったが、これは夕食についても同じ感懐だった。というのは、供せられる料理はイワナの塩焼き、茶碗蒸し、天ぷら、イワナのお造り、野菜サラダ、牛肉の陶板焼きなど、一〇品を超えようかというたいそうなもてなしだったのだが、どうしても食べきれないのだ。昼頃に長野に着いた私たちは、夜に備えて軽く済ませようという思いから駅ビルの中のソバ屋でソバを食したのだが、これがべらぼうな量だった。根がソバ好きなものだから、よせばいいのに、中盛りを頼んだのがいけなかった。普通盛七二〇円に対して中盛り五〇〇円とは結構ポルものだなと思いつながら待っていると、出された中盛りは案に相違した盛っぷりで、普通盛+中盛りを合わせ

ると普段のモリの三枚分はあろうかというところだった。適量で済ませばいいものをソバならすぐにお腹がすくと思つて全部平らげてしまったのだ。これが夜に響いた。折角の料理を食べ散らかした形になって、板前さんにも女将さんにも申し訳ないことをしてしまつた。

さて、翌朝のこと。朝風呂を浴び、いざ朝飯ということと部屋からの戸を開けると、三和土の隅に何か細長いものが蠢いている。動きは緩慢なのだが、それに身体は小さいのだが、どうやら蛇に違いない。そう思つてフロントへ電話すると、手慣れた様子で、すぐ伺いますと言う。待つている間に蛇のほうはこちらの気配を察した様子で、下駄箱の脇の中のほうへ逃げていく気配。トンゴとポリ袋を持つて女将が部屋へ到着した時はもう姿がないのだった。多分、地蛇でしょう、と言つて女将が引き下がり、私たちは朝食に向かつた。前夜のことがあるから、朝ぐらいはしっかり食べなければ、などと気を遣つてすべてを平らげた。湯豆腐、温泉玉子、焼き海苔、鮭、煮豆、イカの刺身など、結構な品数で充分満腹の体となつた。一服して、部屋へ戻ると、先ほどの地蛇がまた出動している。すぐフロントへ連絡すると、間なしに女将が現れて、手慣れた

仕草で地蛇を巻き取り、ポリ袋の中に放り込んだ。やはり、地蛇です、と女将は言い、このまま焼いてしまします、ということだった。

わらび野は温泉もゆったりしていて、なかなかの秘湯の宿だった。この次は七味温泉とペアで訪れるのがいいと思ひながら笹倉温泉へ向かうのだった。

笹倉温泉は二度目の利用である。前回はあの東日本大震災直後の二〇一一年六月、中房温泉から穂高駅まで来て、松本を襲つた大地震のため大糸線が不通となつていて駅の中で四、五時間待たされたときのことである。糸魚川駅は北陸新幹線開業により駅舎も一新して近代化していた。これまでの北陸本線は第三セクター運営となつて細々と生きながらえている感じである。

笹倉温泉龍雲荘は温泉が素晴らしい。琢秀度八(中山平温泉琢秀のすべすべ度を一〇とした自己流尺度)くらいはあるすべすべ・ぬるぬる感がいい。前日のことがあるので昼飯を携行していた駄菓子類いで済ませたお陰で美味しい夕食を堪能した。

三日目の目玉は能生(のう)の鮮魚センターだったが、バスの便の都合で三〇分くらいしかセンターに行けなかった。たまたまお祭りの当日に行き合わせて

それなりの人出で賑わっていたが、さほど珍しいものもなくまずまずだった。鱒を一本買い求めて土産にした。その昔、家が貧乏で鮭が食べられなくて、代用の鱒を食べたことを懐かしく思い出した。おふくろの家計のやりくりの苦労が偲ばれる思いだった。

当初の計画では直江津から上越妙高へ回ることにしていたのだが、所要時間や電車の便の関係で糸魚川へ戻って新幹線に乗った。四輛ついている自由席は七割ほど埋まっただけで、開業したての人氣がまだ続いている感じ充分という印象だった。



蕨温泉



笹倉温泉